

## 事業報告4：東日本大震災・原発事故の避難者支援

東日本大震災および原発事故の埼玉県内避難へ避難されている方向けの情報誌『福玉便り』の発行を他の団体と協力して継続発行しました。2015年秋からは、8ページと4ページを交互に隔月で発行しています。2015年10月からは、引き続き赤い羽根共同募金の助成をいただき発行しています(助成は、2016年9月まで)。印刷も引き続き4ページ建ての号については、富士ゼロックスの社員ボランティアの皆さんのが無償で担ってくださっています。

また、(一社)埼玉労福協を中心、定期開催されている『福玉会議』『福玉リーダー会議(復興彩会議と改名)』を開催し、県内各地で活動している避難当事者グループおよび、支援者団体の意見交換、交流の場をもちました。

2月には、5年をふりかえり、現在の状況を確認し、今後の支援を考えるためのフォーラムをひらきました。

思いがけず埼玉に避難する事になつてからもうすぐ5年になります。長かつたような短かったような年月でした。初めて避難したさいたまスーザーリーナの時から埼玉の皆様にはいつも私達に寄添つていただき、沢山心配していただき、私達のいろいろな問題に真剣に取り組んでいただき本当に感謝しています。私達はこれからもこの心暖かな埼玉の皆様とともにこの地に定住することにしました。もういつまでも避難者だからという甘えを捨てて自立してゆくべき時だと思います。私達東北人にはその強さがあると思っています。いつもかわらずのご支援本当にありがとうございます。「福玉便り」が届くたびに私達を想う、熱い気持ちが伝わってきて心強くかんじいつも感謝しています。(双葉町→加須市、60代)

これまでの活動をふまえ、今後の活動を継続・強化するために新しく「特定非営利活動法人埼玉広域避難者支援センター(通称・福玉支援センター)」を編集部のメンバーを中心にたちあげました。各地の交流会の開催支援や、福玉会議、住宅、教育などのテーマ別の学習会などの開催を行っています。

2017年3月で警戒区域外の避難者(自主避難者)の方々への住宅の提供(借り上げ住宅など)をやめることになっています。2016年から2017年にかけては、南相馬市、浪江町など複数の自治体で、避難区域の再編や解除などが予定されており、解除されると区域外の避難者の扱いになります。多くの避難者が解除後どうするか、とくに住宅の問題で悩んでいらっしゃいます。

埼玉県は県営住宅への避難者の優先入居の制度をはじめました。しかし、入居するとすぐに家賃が発生することや、一人暮らしの避難者には

適用されないなど、さまざまな問題が生まれています。住宅の問題は命の問題に直結します。誌面でも積極的に情報を伝えていきます。

埼玉に家をたてたという方、帰還を選択した方、まだ決められない方……さまざまです。「選択をした」という表現では、言い表すことができない様々な想いを抱えていらっしゃいます。そうせざるを得なかつた、と涙されている方もたくさんいらっしゃいます。

これまで、「どの選択も応援する、いまの生活のプラスになることをお伝えする」という方針で、なんとか毎月発行してきました。これからも、毎月、お便りを発行することで、「一緒にいます」というメッセージだけはお届けしたいと考えています。



福玉募金へのご協力、ありがとうございます！

今年度も号外を発行しました。  
2016年3月「春の号外」号



まだまだ各地で交流会など定期的な活動が行われています。



「福玉便り」と出会い、8ヶ月。毎月届くのを楽しみにしています。本当にありがとうございます。封に福玉便りのおかげで、自主避難の方々とつながることができました。ありがとうございます。今後とも、よろしくお願いいたします。

編集部に届いたはがき・メールより

## 【活動の記録】

## 『福玉便り』

仕様：月刊 A4 8 ページ

発行部数：4000 部

発行：『福玉便り』編集委員会

- ・NPO 法人埼玉広域避難者支援センター
  - ・一般社団法人 埼玉県労働者福祉協議会
  - ・N P O 法人ハンズオン埼玉

協力：生活協同組合コープみらい埼玉県本部

編集デザイン：NPO法人ハンズオン埼玉

印刷：富士ゼロックス埼玉端数値倶楽部のボラン

## ティアのみなさん（4ページ建ての月のみ）

発送：ボランティアのみなさん及び労福協スタッフのみなさん

助成：赤い羽根共同募金

2015年5月現在49号までを発行しています。通常、避難されている方向けに発行しているものとは別に、一般の方向けに避難の状況を知っていたら『2016年春の特別号』を発行しました。

ウェブサイトでも PDF を配信しています。

『福玉募金』

今年度も、福玉便りの発行はじめ、県内避難者支援を継続していくために募金活動を行いました。

## 『福玉会議』『福玉リーダー会議』

3ヶ月に1回程度、開催 毎回、20団体以上が参加。



毎回の発送作業は、避難当事者のみなさまを含めボランティアさんが担ってくださいっています。



今年度もゼロックス端数倶楽部のみなさんが毎月毎月、印刷をしてくださいました。

# 震災から5年、 広域避難者の生活と支援を考える を開催しました。



- 日時：2016年2月27日（土） 13:30～16:30
  - 場所：市民会館うらわ
  - 内容
    - ・県外避難者と支援の現状と課題  
～福玉便り、福玉会議の5年を振り返って～
    - ・自主避難者と支援の現状と課題  
～「ぼろろん♪カフェ」の活動などを中心に～
    - ・埼玉県内の避難者支援団体、当事者団体の紹介とアピール
    - ・県外避難者への復興支援員の活動紹介  
～福島県・浪江町・富岡町・大熊町・双葉町～
    - ・「埼玉広域避難者支援センター」の紹介
  - 主催：埼玉広域避難者支援センター／一般社団法人埼玉県労働福祉協議会／福玉便り編集委員会
  - 共催：認定NPO法人ハンズオン埼玉 震災支援ネットワーク埼玉（SSN） さいがい・つながりカフェ実行委員会
  - 後援：埼玉県法政大学人間環境学部、立教大学コミュニティ福祉研究所

広域避難者センター設立



継続的な支援を目指す

新潟大震災や熊本地震など、災害支援活動で活躍するNPO組織が、これまでの活動を評議する会合が開かれた。震災から5年が経ったが、公的支援の不十分さが改めて浮き彫りになった。一方で、民間が災害に直面したときにNPO組織による活動が大きな影響力を持つことを改めて認識した。震災から5年が経つが、公的支援の不十分さが改めて浮き彫りになった。一方で、民間が災害に直面したときにNPO組織による活動が大きな影響力を持つことを改めて認識した。

## アリーナで活動のNPOなど

今西セイタ（元厚生労働省労働政策局長）　震災直後に活動を始めたNPO組織の活動や支援を評議する会合だ。震災から5年が経ったが、公的支援の不十分さが改めて浮き彫りになった。一方で、民間が災害に直面したときにNPO組織による活動が大きな影響力を持つことを改めて認識した。

### 震災から5年

埼玉の春

# つなげる情報誌



福玉便りの発送作業を行う西川さん（右端）、永田さん（右から2人目）ら（さいたま市で）＝田中健一郎撮影

震災5年

6

無料で毎月4000部

3月上旬、さいたま市浦和区の公営住宅の一室で、東京電力福島第一原発事故後に福島県郡山市から自主

ふるさとを離れて

## 福玉便り 私たちは一人じゃない

避難している瀬川由希さん（41）が、届いたばかりの冊子「福玉便り」3月号をめくった。

東日本大震災の避難者向

け無料情報誌で、毎月約4000部が希望者に郵送され

ている。3月号はA4判カラーで計4ページ。11日前後に行われる埼玉県内の追悼式やイベント、支援団体の活動が紹介されている。「毎月の楽しみ。子供の進学や

住宅問題の特集もあり、とても参考になる」と語る。

瀬川さんは犬の美容師（トリマー）。中学校教員の夫（53）を郡山市に残し、小学2年生から1歳まで、4人の息子とともにさいたま市で暮らしている。郡山市は避難指示区域ではなかつたが、甲状腺がんなど、子供への放射線の影響に不安を感じたのが最大の理由だ。「子供たちが小さかつたので、心配だった」と語る。

埼玉県による震災後半年で、福島を中心とする被災地から県内への避難者は5000人を超える。現在約5100人。各地にグループがあり、「ほかの避難

者もいる」という。

埼玉県内の避難者向け新聞などを参考に、議論を重ねて発刊準備号を12年3月に発行。翌4月21日に福玉便りの第1号を出した。巻頭のあいさつ文で、西川さんはこう記した。

「東北・福島と埼玉の人人が『出会いってよかった』と思える機会があつてほしい。出会いから、たくさん

の『福の玉』が生まれてほしい」と語る。

誌面のレイアウトや校正を担当する西川さんは、原発事故直後、放射線への不安から、2人の娘を滋賀県の実家に3週間、避難させた。「過剰反応と言われるかも」と思ったあの時の気持ちを忘れられない。震災でどんな選択や決断をしても、誰も否定できないし、尊重されるべきだと語る。避難させられた人、自主避難した人。「それぞれの人が一番よい選択ができるよ」と考えて誌面を作り、3月号で通算46号、4月に創刊4年を迎える。

県内支援団体との調整役を務める県労働者福祉協議会の永田さんは「避難者は孤立を深めている人もいる。福玉を心のよりどころしてくれる人がいる限り、避難者をつなぎ続けたい」と話している。

毎週末、郡山から来てくれる夫と、福玉便りに載つたイベントに参加する。自ら避難者の会合では

編集メンバーは6人。さいたま市を拠点に寄付などで運営され、富士ゼロックス埼玉社員会に印刷を無料で引き受けてもらっている。

誌面には、避難者に足りないものを届けようと「提供物資のご案内」「提供のお願い」のコーナーを設け、県内で受けられる内部被曝

者の状況を知りたい」「かつての近所の人たちはどうしているのだろうか」との声が上がった。

2011年末、避難者の支援活動を行っていた県労働者福祉協議会の永田信雄さん（61）やNPO法人「ハズオソン埼玉」の西川正さん（49）らの間で、「県内に避難してきた人たちをつなげたい」と情報

調査や就職相談、進学情報についての近所の人たちはどうのほか、原発事故の賠償も特集した。

読者アンケートや座談会も行い、「福島から」のコトナード福島県内の避難者を紹介。編集部には「同じ境遇の人に初めて会えた」「知りたいことがわかる」などの不安や疑問を相談できる。瀬川さんは「当事者同士で悩みを打ち明け、一人ではないと勇気づけられる」という。



（山田朋代）